

沿川居住者への聞き取りから考える 明神川保全に向けての現状と課題

宇 戸 純 子

1. 過年度調査の概要と本調査の目的

京都市北区上賀茂の明神川は賀茂川から取水された水が流れる全長約2.7 kmの小河川である。取水された賀茂川の水は上賀茂北部の住宅地からゴルフ場内を流れ、上賀茂神社境内を経て社家町へと至る。社家町を貫流した水はやがて縦横に分かれた水路を経て農業用水となって田畑を潤す。

川は水によって流域が結ばれ一つの系としてのつながりがもたらされる。それゆえに上流域から下流域まで全体をトータルに見渡す視点が不可欠であり、特に明神川のような人工河川ではそれぞれの流域が互いに協力し支え合いながら全体の維持を図っていくことが重要である。

このような観点からこれまで明神川の水辺空間構成の全体像を捉えるために取水から排水に至る水路の位置や形態、利活用からみた川の状況を調査してきた¹⁾²⁾。その結果、得られた明神川流域の土地利用の特徴及び水路の形態から、ここでは以下の7つの流域に分類する。

- ①上流域・農地
- ②上流域・住宅地
- ③上流域・ゴルフ場
- ④上流域・上賀茂神社境内
- ⑤中流域・社家町
- ⑥中流域・住宅地
- ⑦下流域・縦横の農業用水路

ここに示した①～⑦の流域のうち、川との関わりの主体が明確なのは、③上流域・ゴルフ場、④上流域・上賀茂神社境内、⑤中流域・社家町、そして⑦下流域・縦横の農業用水路である。③と④については私有地の中を流れる特異性をもつと共に、それぞれ修景用水、神事の水としての役割を有している。⑤については伝統的建造物群保存地区の町並み景観が川と一体のものとして認知されており、その景観を守っていくための法的、人的体制がある。さらに⑦については今後も継続される見通しを持つ農地への用水供給という利用が挙げられる。逆に川との関わりの主体が不明確であったのは①上流域・農地、②上流域・住宅地、⑥中流域・住宅地である。①は、隣接する農地に供給している水が別の水系であること、②及び⑥については人との関わりが見て取れる空間構成をなしていないことが挙げられる。

このように明神川では直近の川を利活用する主体が不明確な流域があるものの、京都市内に残存す

る泉川や太田川、高瀬川などの人工水系と比較すると川と人との関わりが極めて多様かつ濃密な流域が存在しているといえる。

今後の課題はそれぞれの流域がもつ人と川との関係をより良好に持続させていく方策を考えること、利活用の主体が明らかではない流域において何らかの人と川との関わりを構築していくこと、さらにそれらの流域間をつなぐための人的交流を促進することであると考ええる。このような状況が整ったとき、明神川はより強固な人との結びつきを持つ川へと生まれ変わり、流域相互が共生関係を保ちながら、歴史に裏打ちされた新しい水文化の創造が可能となるであろう。

本稿では、先の調査で利活用の主体が不明確であるとした②明神川上流域・住宅地を対象とし、川沿いに暮らす人々に川との関わりについての状況を聞き取った結果から、明神川と人との関係の現状を探り、明神川流域全体で共有していくべき課題と今後の展望を考える。

2. 明神川上流域の住宅地の概要

(歴史及び位置)

明神川上流域の住宅地は現在「柗野」と呼ばれる地域の一角に存在する。この辺り一帯、即ち賀茂川上流東岸一帯の河岸段丘を地元では「上ノ段」「下ノ段」「岐れ」と区分し、これらの地域を総称して「柗野」と呼んできた。古くから上賀茂神社の神域として維持されてきた柗野は寛永二年（1625）頃に初めて田畑が開かれたところであり、この新田開発の後も上賀茂村の枝村として上賀茂神社が領³⁾していたとされている。

地元で「岐れ」と呼ばれる地域の中には「葵ノ森」という地区が存在する。葵ノ森はさらに「南葵」「中葵」「東葵」「北葵」の4つの町内に区分され、明神川は図1に示すようにこのうちの東葵及び北葵と呼ばれる町内を流れている。

(道路)

葵ノ森地区のやや北寄りには東西軸としての幹線道路、府道京都広河原・美山線（幅員約8m・片側歩道）があり、地区の東寄りには南北軸としての府道京都・京北線（幅員約5m・歩道なし）がある。府道京都広河原・美山線は鞍馬を経て京都市北部へと抜ける主要道路であるため通行車両が常に多く、また府道京都・京北線も柗野地域の生活幹線道路であるため幅員の狭さにもかかわらず通行車両が比較的多い。「岐れ」という名が示すように古くから交通が分岐する地点としての機能を持っている。

(用途地域)

明神川周辺の用途地域指定は、ゴルフ場から府道京都広河原・美山線までが第一種住居地域（15m第2種高度地区）、府道京都・京北線沿いは第一種中高層住居専用地域（15m第1種高度地区）、その両側が第一種低層住居専用地域（10m高度地区）となっている。このことから明神川周辺は概ね住居系の建築物のみが立地できる環境であることがわかる。

(世帯数と町区分)

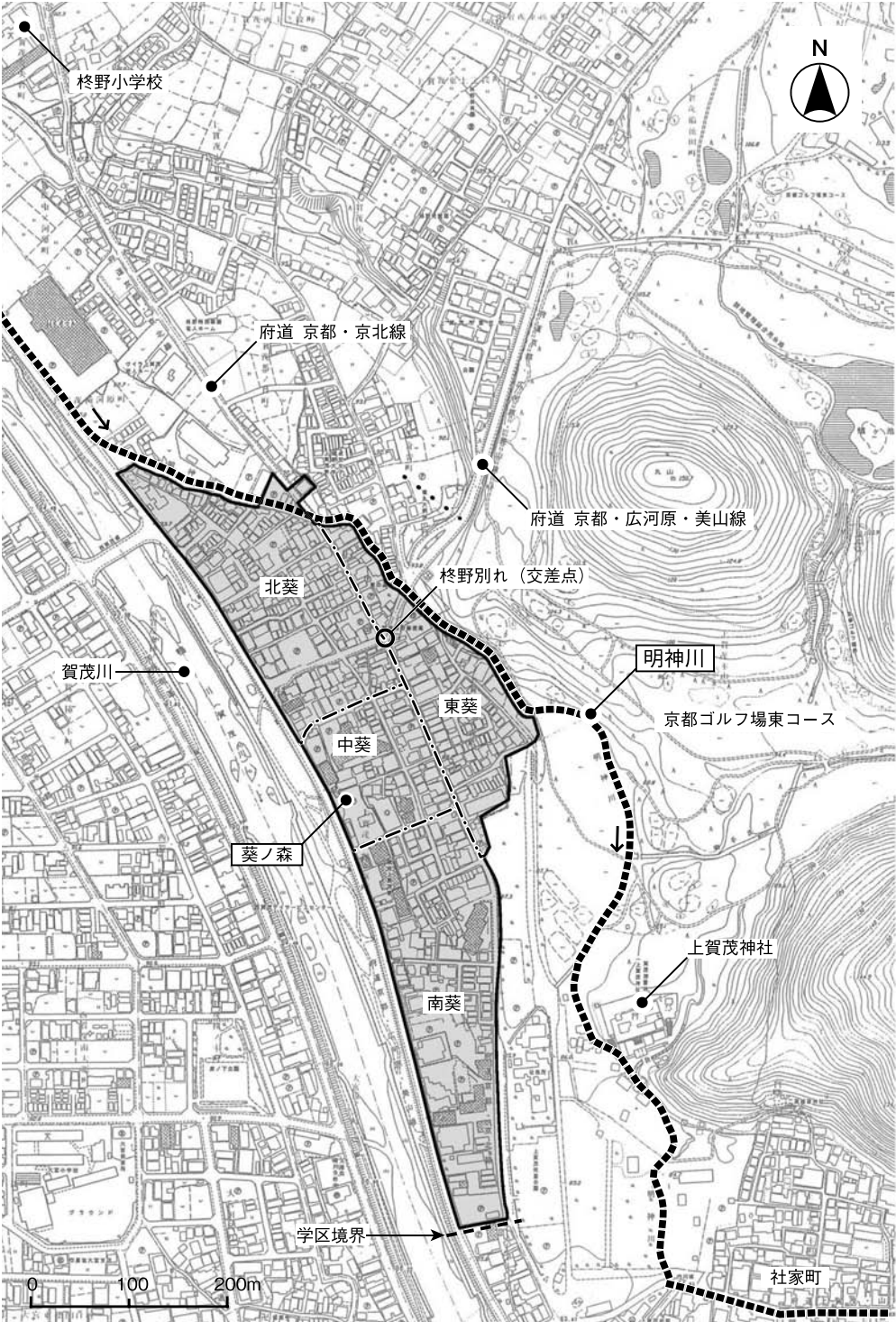


図1 明神川上流域位置図

葵の森地区の世帯数は最新の町内会の資料によると南葵が132世帯、中葵が58世帯、東葵が150世帯、北葵が178世帯あり、この他2棟のマンションに114世帯が居住⁴⁾している。この地区は町名でいうと上賀茂葵之森町、上賀茂朝露ヶ原町、上賀茂馬ノ目町、上賀茂西河原町に該当するが、南葵ほか三つの町区分は必ずしもこの町区分と一致するものではない。

(学区)

町名の冠に上賀茂の名は入っているが現在の小学校区は上賀茂学区ではなく柊野学区である。さらに中学校区においても上賀茂小学校の児童は加茂川中学校へ、柊野小学校の児童は西賀茂中学校へ通学するため、上賀茂のコミュニティとして一括りに取り扱うことは実態と異なる。しかし、先述したように元来上賀茂の枝村としての歴史を有する柊野は昭和54年(1979)に柊野小学校が開校するまで上賀茂のコミュニティに属していた。葵ノ森地区をはじめとする柊野の児童も上賀茂小学校に通学していたのである。したがって昭和54年を境とし上賀茂学区というコミュニティの中で人間関係の繋がりが地理的親近感を持つ世代と、持たない世代に大きく分かれる。

(都市化の変遷)

図2は葵の森地区周辺の土地利用状況の変遷について示したものである。これによると、賀茂川河道の固定化、堤防上の道路の建設、府道京都広河原・美山線の拡幅と堤防上道路への接続、細街路の設置など、都市基盤の大きな変化は昭和30年代に訪れていることがわかる。昭和44年以降の地図からは都市基盤整備に伴い徐々に住宅が増加していったことが読みとれる。このように柊野地域の都市化に伴う人口増加と賀茂川右岸の西賀茂地域の住宅開発により昭和54年柊野小学校は開設される。

3. 聞き取り調査の方法と聞き取り項目

聞き取り調査は明神川が流下する東葵と北葵の町内を対象とし、特に明神川に隣接した敷地の居住者に限定し行った。これは川と敷地が接していることにより日常的に直接の関わりが発生しているのではないかと考えたからである。調査の方法は東葵、北葵の住宅を直接訪問し応対に出た方に趣旨を説明、こちらの問いかけに対する回答を記録していった。訪問時間帯は平日の午後から夕方にかけて設定した。

敷地が隣接するという条件に該当する住戸は37戸(2002年4月発行のゼンリンの住宅地図による)あったが、無作為に訪問し協力の得られた11戸、11名から話を聞くことができた。なお、11戸の中には住宅だけではなく事業所も含まれる。

また、調査の際「明神川の灯ろう流しイベント」についての情報が得られたため、これについては別途イベントの世話役の方を訪問し直接聞き取りを行った。調査時期は2004年9月、イベントの世話役の方への聞き取りは2005年3月に行った。

質問内容は下記の項目を準備したが、個別のやり取りからときには関連の話に発展することも含め自由に語ってもらうことを原則とした。

(聞き取り項目)

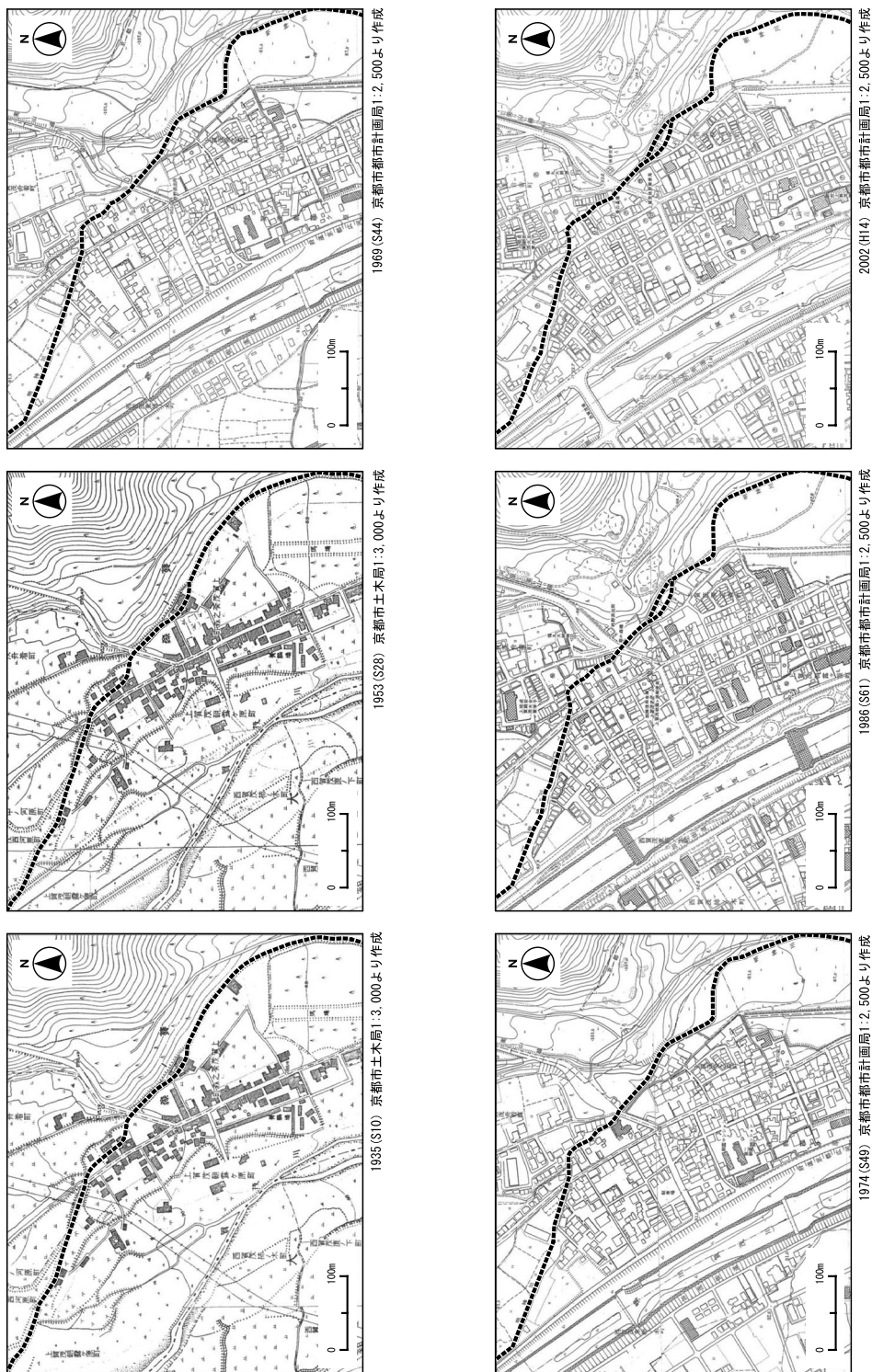


図2 明神川上流域（菱ノ森）の土地利用の変遷

①回答者の属性

- a. 性別
- b. 世代
- c. 居住年数

②明神川の存在・位置・役割についての認知

下記 d～m について、「知っている」「概ね知っている」「ほとんど知らない」「知らない」という 4 つの項目を提示し選んでもらった。

- d. 明神川の名称
- e. 賀茂川からの取水
- f. 取水口の位置
- g. ゴルフへ流れていくこと
- h. 上賀茂神社境内へ流れていくこと
- i. 神社で宗教行事に使われていること
- j. 社家の庭園に引き込まれていること
- k. 農業用水として使われていること
- l. 上流部の流路の位置
- m. 下流部の流路の位置

③明神川と回答者との関わり

過去及び現在における明神川との関わりについて問うものであるが、問いかけ自体が漠然としているため話のきっかけとして下記の質問を投げかけた。

- n. 川の様子について気にしているか
- o. 川の水に触ったことはあるか
- p. 川で遊んだことはあるか
- q. 川の清掃をしたことはあるか
- r. 川で生き物を見かけたことはあるか
- s. きれいな水質だと思うか
- t. 川の水を生活の中で使うことはあるか
- u. 改善すべき点はあるか

4. 調査結果

4-1 沿川居住者への聞き取り

結果は上記①と②については表 1 に、③については以下にコメントとしてまとめた。なお、記述したコメントは意識したものであり回答者の口述のままではない。

表 1 明神川の存在・位置・役割についての認知

①回答者の属性				②明神川の存在・位置・役割について									
	a.性別	b.世代	c.居住年数	d. 明神川という名称	e. 水源	f. 取水口の位置	g. ゴルフ場へ流れていくこと	h. 神社へ流れていくこと	i. 宗教行事に使われていること	j. 社家の庭園に引き込まれていること	k. 水が農業用水として	l. 上流部の流路の位置	m. 下流部の流路の位置
A	女	70	20～29	◎	◎	×	◎	◎	○	◎	×	△	×
B	男	70	50～59	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	△
C	男	50	50～59	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
D	女	30	6～9	◎	◎	◎	×	◎	◎	×	×	○	×
E	男	50	20～29	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○
F	女	60	40～49	◎	◎	◎	◎	◎	△	◎	◎	○	○
G	男	90	60～69	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
H	男	60	50～59	◎	◎	◎	◎	◎	◎	×	◎	◎	○
I	女	70	50～59	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○
J	女	60	50～59	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
K	女	60	3～5	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○

注) ◎=知っている ○=概ね知っている △=ほとんど知らない ×=知らない

③明神川と回答者との関わりについてのコメント

[Aさん 70代 女性 居住年数20～29年]

「いつも庭の草取りをしながらここから神聖な上賀茂神社へ入っていくのだなあと川を眺めています。川沿いのサクラ数本はここに来たときに夫が植えたものです。部屋から庭、明神川、ゴルフ場と、景色のつながりを考えてつくりました。サクラの季節は本当に風情があつてきれいです。雨の時、川の水が濁りますがそれ以外はわりにきれいでゴミも少なく特に問題は感じていません。このままの姿であってほしいと思います。」

[Bさん 70代 男性 居住年数50～59年]

「小さいときはこの川で泳ぎました。ここには水車がありました。仕事の合間に川の様子は毎日見えています。カモやコサギがやってきます。魚もいます。ホタルは毎年楽しみにしています。今は若い人に任していますが以前は川掃除もやりました。タイヤ、自転車、空き缶、ペットボトルなどのゴミが多いため水がきれいだとは思いません。川の水は柄の長い柄杓ですくって庭木の散水や道路の打ち水に使っています。暗渠にせずにこのまま置いておいてほしいです。」

[Cさん 50代 男性 居住年数50～59年]

「子どもの時この川で泳ぎました。川の上流部の様子や下流部の様子もよく知っています。水の状態についてはいつも気にしていますが、特に大雨のときには増水し床下浸水するのではないかと心配でたまりません。川でコイやウナギを見かけたこともあります。水は以前よりはきれいになったと思

いますが藻が多かったりヘドロが底にたまっています。』

〔Cさんの奥様 女性〕

「川沿いの草がすぐに伸びるので自主的に草刈りをしています。また大きなゴミ（犬小屋、炊飯器、タイヤ、ゴミ袋など）が引っかかるので引き上げることもあります。大雨の時は浸水が怖くて何度も様子を見に外へ出ます。そんなとき夜は安心して寝ていられません。でも、水があるため昆虫が多くて自然を感じられる上、夏はとても涼しいです。ホタルもたくさん出ます。庭木に水まきするにも手近だし増水以外は今の環境に満足しています。』

〔Dさん 30代 女性 居住年数6～9年〕

「ここに越してきた当初は部屋の中にも魚のはねる音がよく聞こえてきました。普段はこの川について意識することはありませんが大雨の時は溢れないか気になります。ここから上流の様子を知っているので水は見た目にはきれいなようですが、本当に水質が良いとは思いません。さわったこともありません。湿気が気になるのももう少し川から離れたところに住めば良かったかなと思うこともあります。』

〔Eさん 50代 男性 居住年数20～29年〕

「明神川が神社へ流れていくことや社家町へと続いていること、ここから取水口までの状況も大体知っています。子どもの時ここにはいませんでしたので遊んだことはありませんが普段家の横を流れているので川のことは気にしています。初夏にはホタルが飛んでいます。今まで川の掃除をしたことはありません。川の水は下水が整備されたこともあり、きれいだと思います。庭木の散水や打ち水に使うことがあります。汚れてほしくないし触らないようにしてほしいと思っています。』

〔Fさん 60代 女性 居住年数40～49年〕

「明神川が神社へ流れていくこともどこから取水しているのかも知っています。40年ほど前は水がきれい川近くの人は洗濯をしていました。私の子どもも小さい頃はこの川で遊びました。今は下水が流れているように思いますし水がきれいだとは思いません。最近の子どもも川で遊ばなくなりました。大雨の時に床下浸水するので困っています。今年も2回ありました。』

〔Gさん 90代 男性 居住年数90年〕

「生まれたときからここに住んでいますので明神川のことはよく知っています。子どもの時に遊びました。子どもの頃に比べると賀茂川も明神川も魚が減ったように思います。明神川の掃除は賀茂の農家の人がされていますが、私も夏場は2～3回膝までの長靴を履いて自主的に護岸の草を刈っています。下水が流されていた頃に比べるとましですが水質は良いとは思いません。見た目も汚れている

し上流での水の使い方や様子を知っているからです。今は川の横の階段を下りて雑巾をゆすぐことに使っています。大雨が降って増水したときは溢れないか心配になりますが、火事が起こったときには役に立ちますし大事な川だと思っています。」

〔Hさん 60代 男性 居住年数50～59年〕

「子どもの頃からここにいますので明神川のことはよく知っています。ここには水車がありました。魚とりをしたり舟を浮かべたりして遊びました。水が神社の中へ流れていっていることも社家町を流れていることも知っていますが社家の庭園に引き込まれていることは知りませんでした。普段川のことをあまり意識していませんが台風の時や大雨の時は気になります。今は明神川の水を使うことはありません。家の前の道路沿いの側溝にも明神川から引いた水が流れていますので、水まきなど必要なときはグレーチングを持ち上げて使っています。」

〔Iさん 70代 女性 居住年数50～59年〕（電話による聞き取り）

「明神川が神社へ流れていくことや社家町へと続いていること、ここから取水口までの上流の様子も大体知っています。川の様子については時々、雨が降ったときに気にしています。護岸につくられた階段（3段程度）を下りて直接川の水で雑巾を洗っています。重宝しています。川の清掃は町内で一斉に行うときに参加していました。普段でも気づいたらゴミを拾うようにしています。川の水は一頃に比べたらきれいになったと思います。今のままでいいと思います。」

〔Jさん 60代 女性 居住年数 50～59年〕

「明神川が神社へ流れていくことや社家町へと続いていること、ここから取水口までの上流の様子も大体知っています。川の様子についてはいつも気にしています。昔は水がきれいでお風呂の水も川からくみあげて使っていたそうです。夫が子どもの頃、川で泳いだりして遊んだそうです。気づいたときにゴミを拾ったりしています。孫が川の生き物を探したりして遊ぶこともあります。絶えず流れていますので水はきれいだと思います。庭木の散水や道路の打ち水に重宝しています。真夏には何度も水を道路にまきます。最近護岸のコンクリートを高くする工事の時に横にあったサクラの木が切られてしまいました。隣接する住宅から毛虫への苦情もあったので寂しいけれど仕方ありません。サクラが生えていたところには洗い場がありますが工事の時に土木事務所の人から車道にはみ出しているため危険だ、取ってしまえばと言われました。昔からあったものですし今も使っているのも皆で頼んで残してもらいました。川の横に住んでいて良かったと思っています。」

〔Kさん 60代 女性 居住年数3～5年〕（以前は近くに約30年居住）

「明神川が神社へ流れていくことや社家町へと続いていること、ここから取水口までの上流の様子も大体知っています。川の様子についてはいつも気にしています。川の掃除もほぼ毎日しています。」

空き缶は頻繁に流れてくるので拾っていますし、昨年はテレビが流れてきました。川にはオイカワがいます。見た目にも水はきれいだと思います。川の水は庭の小さな池の金魚の水として使っています。また庭木の散水や道路への打ち水に柄杓ですくって使っています。家のすぐ横が大雨の際に増水し川の水が溢れたことがありますが、護岸のコンクリートを高くする工事をしてもらいましたので今は心配ありません。家が川の横に隣接していて良かったと思っています。水があると涼しいし楽しませてもらっています。この川では地蔵盆のときに町内会で灯ろう流しをします。情緒があつてとても良いです。」

4-2 沿川居住者への聞き取りのまとめ

①回答者の属性

11名の性別の内訳は、女性が6名、男性が5名、世代は30代1名、50代2名、60代4名、70代3名、90代1名であり、60代以上が過半数である。居住年数は10年未満の人が2名、10～20年未満の人が2名、30年～40年未満の人が1名、50年以上の人が6名おり、居住年数の長い人が多い。

②明神川が存在・位置・役割についての認知

表1は明神川が存在・位置・役割についてdからmまでの質問に対する答えをまとめたものである。まず、明神川という川の名称については全員が知っていると言った。次に水源が賀茂川であることについても全員が知っていると言った。取水口の位置について知らないと言ったのは僅か1名であり他の回答者は全て正確な位置を知っていた。

一方、対象地から下流部に関するg～k及びmの問いかけに対しても、居住年数の長い回答者のほとんどが自分の敷地の脇を流れた後、ゴルフ場を経て上賀茂神社に至ること、さらに社家の門前を流れることを知っていた。ただ、社家を抜けた後の流路の位置について正確に知っている人は少なく、川が覆蓋されてから以降の用水路の位置まで知っている人はいなかった。

また、意外なことに地元で60年近く居住している男性が社家の庭園に引き込まれていることを知らず、50年近く居住している女性も神社で神事に使われていることをほとんど知らないと言った。30年近く住んでいる女性で農業用水としての利用について知らない人もいた。このように概ね上流部に対する認知より下流部に対する認知の方が低いといえる。

③明神川と回答者との関わり

●全ての人が川に関心を持っている

全ての人が明神川の様子について何かしら気に留めていることがわかった。何気なしに毎日川の様子を見る人や大雨や台風の際に川が増水しないか様子を見る人など、程度の違いはあれ川の横に居住していることを意識する場面がいずれの居住者にもある。

気になる点として多かったのが増水による不安感である。明神川は人工的に水を取水しているため

降雨時には取水口の水門で賀茂川の水の流入を制限できる。問題は流域に降った雨水がこの川へと一気に流れ込むことだ。居住者が感じる増水、浸水への不安は周辺から流入する雨量が多いことから起こる。また量が増えるだけでなく水の勢いも強い。流路の位置が河岸段丘の最下部にあるため、周辺の側溝から溢れた水が滝のように流入するからだ。他の流域で同様の聞き取り調査を実施していないため断定することはできないが、大雨の際には平常時の姿から大きく変貌し明神川流域の中でも際だって住民に不安感を与えている部分であると考えられる。

●「場を使う」関わりから「水を使う」関わりへの変化

子ども時代から現在の場所に住んでいた人は皆一様に懐かしそうな表情を浮かべ当時の川での遊び体験を語ってくれた。泳いだり、魚を捕ったり、舟を浮かべたりした楽しさは何ものにも代え難い大切な思い出となっているようだ。

ただ、過去の生き生きとした体験は今日の明神川に受け継がれているものではない。つまり、子どもや孫も同じように川で遊んでいるとのコメントは少なく、ゴミが気になるという人が多い。川は子ども達が生き物を追いかける豊かな遊び場であるという認識はなくなっているように思われる。確かに最近でも水鳥や魚、ホタルが生息しているというコメントもあるが、その言葉の奥には「この川にはまだ生き物がいる。いてほしい。」という願いにも似た気持ちが込められているように感じた。

一方、結婚を機にこの土地にきた女性の回答者は子ども時代の遊び体験こそないが、現在の川との関わりについて「川の水を頻繁に使っている。植木の散水や打ち水にとっても役立つ。川の水が手近にあることがありがたい。」と話す。

両者の話から推量されるのは川が「場」ではなくなったという現実だ。奇しくもJさん（女性）の「川に付設した洗い場が護岸工事の際に撤去されそうになったが昔からあるものだし皆で頼んで残してもらった」というコメントには、植えられていた数本のサクラとともに、かつて川が持っていた「場」としての存在の記憶が立ち現れている。

4-3 灯ろう流しイベントの世話役に対する聞き取り

[Mさん 70代前半 男性 居住年数70年]

柘野町内会連合会副会長や柘野社会福祉協議会副会長など、地域の要職を引き受けておられる。北葵町内会における灯ろう流しイベントの発案者。話の中に出てくる明神川とは東葵及び北葵を流れる明神川である。

Q. 1 明神川とのこれまでのつき合いについてお話しください

(1) 子どもの頃の明神川の様子（昭和10年代）

本当に水のきれいな川でした。今のように川底に泥や空き缶などのゴミが全くなかったし底の石ころが透けて見えていました。川にはウナギもいましたし、タニシやシジミ、ドジョウもいました。ホ

タルもたくさんいて麦わらでホタル採りをしました。川は両岸が石垣で瀬と淵があり浅瀬にはセリが生えていてよく摘んだものです。石垣は今のような裏込コンクリートを使わないものでした。川幅は今と同じくらいで水深は深いところで30 cm 位あったと思います。

現在川幅が広がっている辺りは草が生えていてマムシが多かったので、漢方薬の原料にするためマムシ採りの人がよく来ていました。親には気をつけろと注意されたものです。

鞍馬街道より南側はせせらぎになっていました。水車小屋が3軒あり、近所の人は米や麦などを持って行ってそこで粉を挽いてもらっていました。

(2) 当時の川の使い方

水がきれいなので近くに住んでいる人は川で顔を洗っていました。お風呂にも大量に水が必要なので川の水を利用していました。食器や野菜も洗っていました。洗濯にも使っていました。昭和30年代末頃にオムツを洗ったりしながら、そこが近所の方々の社交場になって賑やかだったのを覚えています。(奥様より) その場所は今も洗い場として残っています。

(3) 川の変化

洗濯などはやっていましたが川で顔を洗わなくなったのは昭和30年代中頃からだ⁵⁾と思います。田畑で農薬を使い出してからでしょうか。昭和30年代中頃から京都産業大学ができたり鞍馬街道が拡幅されたりし、昭和40年代に入ると住宅が次々につくられて周辺がざわついてきました。川には生活排水が流されその頃は今のように厳しい規制もなかった時代ですからどんどん水が汚れていきました。

Q2. 灯ろう流しイベントのきっかけと具体的な内容について教えてください

(1) きっかけ

灯ろう流しは地藏盆(お盆過ぎの最初の土日)のときのイベントとして6~7年前から始めました。お地藏さんは町会所のところにあります。元々20年ほど前から灯ろうづくりのイベントは行っており、各住戸の玄関前に飾っていました。でも、ただ家の前に飾るだけではおもしろくないので、明神川に浮かべてみたらどうかと寄り合いの時に提案したのです。灯ろう流しを行う以前にも川を使ったイベントをやっていました。マスやウナギを買ってきて川に放して捕まえるいわゆる「魚つかみ」です。子ども達にケガのないように魚つかみの前には川の中に入って泥を揚げたりガラスなどの危険なゴミを拾ったりしていました。

(2) イベントの内容

まず各々の家で思い思いに灯ろうをつくってもらいます。灯ろうには大人は各自の願い事や念仏の言葉、子ども達は絵を描きます。(写真1・2/Mさん宅に保管されていた灯ろう)そしてそれを明神川のところに立てた支柱に渡したロープにぶらさげます。こうやって昼間は町内の皆が思い思いにつくった灯ろうを展示したのを眺めて楽しめます。そして暗くなってからその灯ろうをはずして、へぎ(折敷)の上に乗せ、上流から橋のところまで流します。橋のところ待ち受けた人が受け止め引き上げます。



写真1 手づくりの灯ろう

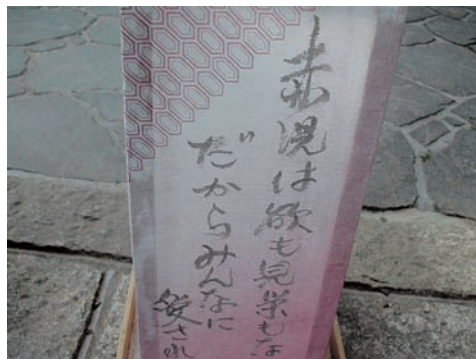


写真2 願いを書く

(3) 北葵の町内会

葵ノ森は4つの町内に分かれています。北葵の町内会が一番活発に活動しており住民同士の交流が多いといわれています。柊野には25の町内会がありますがその中でも最も住民同士の仲がよいのではないのでしょうか。地藏盆のイベントだけでなく、カラオケや観音講などほかにもいろいろとやっています。

Q. 3 川の清掃や維持管理に関する活動の様子についてお話しください

昭和40年頃だったと思いますが明神川美化保存会から要請があつて毎年1回、川の泥あげを町内会で始めました。初夏にやっていました。ところがだんだんとその作業が辛いという人が多くなり10年ほど前にやめました。普段会社勤めをしている人が多いですから水を含んだ泥を人力で揚げる作業は体がもたないのです。また、揚げた泥は道路の端に積み上げておくのですが、悪臭を放つ上、役所がすぐに引き取りにきてくれないのです。早く取りに来てもらえないかと連絡すると「泥を揚げないでそのままにしておいてほしい」というようなニュアンスのことを言われました。そんなこともあり、この川を農業用水として使っておられる水利組合の方も掃除をされる事だろうし、町内会で無理をするのはやめようかということになりました。

今は各自気づいたらゴミを拾う程度で町内会としての清掃はやっていません。

Q. 4 明神川の下流部、上賀茂の町内との交流はありますか？

町内会としてはありません。でも、上賀茂神社の総代をやっている関係で上賀茂の人と会う機会があります。北区の社会福祉協議会の集まりで会うこともあります。小学校が一緒だったので同級生や先輩、後輩も含め皆顔なじみですから、愛称で呼び合う仲です。北区は18学区ありますが、その中であつて柊野と上賀茂は結びつきが強いと思います。以前町内会として川の掃除をやったのも、上賀茂の知り合いから頼まれたからです。「**さんが上の方でも協力してもらえないだろうかと言ってるが・・・」と、町内の寄り合いで話を出すと、その人のことを知っている人が多いものですから「**

さんが言っているのなら協力しようか」という話になったのです。知らない人から言われても「なんやろ?」と思いますが知り合いだし頼みやすいし頼まれやすいというところはあります。

4-4 灯ろう流しイベントの世話役に対する聞き取りのまとめ

Mさんは根っからの地元の人である。幼少期から明神川と触れあったこともあり、明神川の様子について鮮明に記憶しておられた。Mさんとの会話は途中から奥様も加わり有意義な時間となった。

Mさんとの会話の中で印象に残ったのが「うちの町内には明神川がありますから」という言葉であった。子どもの頃から親しんできた川が意識の上で自己の領域の中にしっかりと位置づけられていることがこの言葉からうかがえた。

●触れる川から眺める川への転換

Mさんの話から北葵の町内会では灯ろう流しを実施するまで魚つかみイベントを行っていたことがわかった。そこにはかつて明神川で魚を追いかけた興奮や楽しさを現代の子ども達に体験させてやりたいとの大人達の思いがあったのだろう。

魚つかみから灯ろう流しへのプログラムの転換は、5～6年前からだという。どちらも川という空間、いわゆる場を活用する行為であるが人の知覚という点からは大きな違いがある。

魚つかみは人が川の中に身体を入れ肌で水と直接触れあう行為である。足の裏に伝わる川底の感覚、足を動かすたびに感じる水圧、水の色や匂い、そして川の中から眺める護岸や周辺の町の風景は、数十センチ高い道路から見える日常とは全く異なった風景として目に焼き付いただろう。はねる魚、逃げる魚を追いかけて子ども達が川の中を動き回る行為はまさに五感をフルに活用した動的な活動である。

一方、灯ろう流しは川に浮かべた灯ろうを鑑賞する行為であり、五感の中でも視覚に比重をおいた静的な活動である。暗闇の中、水に浮かぶほのかな灯りの揺らめきを見ながら幻想的な雰囲気に浸る体験は、地藏盆という宗教行事と相まって大人も子どもも深く静かに魂を揺さぶられるに違いない。

この両者とも川が持つ場としての特性を存分に活用しているといえるが、触覚を主とする活動から視覚を主とする活動へ大きく転換したともいえる。Mさんは灯ろう流しに変えた理由として「魚つかみが何年も続いていたことと灯ろうを玄関先に飾っておくだけではもったいないと感じていたこと」としているが、その深層には泥が堆積した川に子ども達を入れることへの抵抗感が少なからずあったのではないかと推測する。

年に一度、町内会で行っていた泥あげが中止されたのが十年ほど前、そして魚つかみから灯ろう流しへの転換が6～7年ほど前。そこには大人達が自らの皮膚を通して知覚しなくなった川に子ども達を入れる事への不安感があったとするのは考えすぎだろうか。

Mさんの子どもの頃、明神川は大変美しい水質の川であったという。底には今見られるような泥は全く堆積しておらず小石がきらきらしていたという。明神川をまるごと身体で感じる体験を甦らせ

るためには、触ってみたいと思えるような美しい水質を取り戻すことが最重要課題であろう。

●上賀茂小学校のコミュニティが支えてきた明神川の保全

Mさんとの会話でもう一つ印象に残った言葉がある。「知り合いから頼まれたら動く気になるが・・・」というひと言である。明神川がこれまで保全されてきた理由の一端を垣間見たような気がした。

北葵の町内会では明神川の維持管理のために年に1度、初夏に川掃除を行ってきた。先述した泥あげがその川掃除の事であるが、この掃除は昭和40年頃から始められ、10年ほど前に中止されるまでおよそ30年近く続いてきたことになる。興味深いのは掃除を始めた理由である。当時明神川美化保存会（昭和42年発足⁶⁾）会員の上賀茂の顔なじみの人から「上流部でも掃除に協力してもらえないだろうか」と頼まれたことがきっかけだという。Mさんの世代の人は上賀茂小学校に通学しており、現在の社家町界隈の同世代の人々と皆顔なじみである。そのため大人になってからも気がねせず様々なことを頼んだり頼まれたりする人間関係ができていたのだという。このような上賀茂小学校を核とする人間関係が明神川保全の根底にあったのである。

●新たなコミュニティによる保全の可能性

しかし、長年続いてきた上流と下流を結ぶ上賀茂小学校のコミュニティは昭和54年に柁野が新たな小学校区に分離されたことにより失われる。以後柁野の児童は上賀茂の児童とは別のコミュニティに属することになった。したがってこの世代が地域の担い手となる時代にはMさんのような人間関係を望むことはできない。

新たに設立された柁野小学校は賀茂川を挟む兩岸の地域を校区に持つ。ここに明神川の水源である賀茂川を視野に取り込んだ意識の拡がりを新たな可能性として見いだすことができる。これまでのコミュニティが失われた代わりに賀茂川を軸とした新たなコミュニティが生まれるのである。賀茂川を強く意識する柁野の人々と上賀茂の人々がパートナーシップの元、明神川の保全について連携できる日がやがて訪れることを期待したい。

5. 結び

これまで見てきたように過年度に実施した水辺空間構成の調査では不明確であった人と川との関わりが、沿川の居住者に直接話を聞くことによりその一端が明らかとなった。

明神川上流域の住宅地における利活用の主体は他の流域に見られるような集団や組織ではなく、かつても今も一人一人の生活者である。水のきれいな昭和20年代、顔を洗う、野菜を洗う、風呂の水を汲む、洗濯をするなど個々人が生活の中で川を利用していた。また、それらの行為のほとんどが川岸に一定時間滞留し続ける行為であったことから、そこに人が集まり賑やかな「場」が形成された。しかし、水の汚れの進行と時を同じくし上水道が引かれると、それまで川で行っていた風呂の水くみや

洗濯などの生活行為が住宅の内部で行われるようになる。当然のように川での営みは消えていった。

現在は庭や道路の水まきなど水質のレベルがそれほど要求されない生活行為にのみ利用され続けているが、これらの行為から「場」は生まれにくい。人が滞留する場でなくなった川岸は、そこに滞留しやすく使いやすい場のかたちが工夫される必要性はなく、水路としての機能のみが顕在化していく。やがて、川沿いの人々はその水路が何のために誰のために存在するのか改めて思い至ったとき、元来農業用水としての水路であったことを認識する。この水路は我々のものではないのだと。そして川が自己の領域であるという意識は薄れていく。

このようにこの流域で明神川がたどるプロセスを想像すると川岸に場を復興することの重要性がはっきりと見えてくる。幸いなことに北葵の町内会では灯ろう流しイベントを行って明神川沿いを「場」として利用し続けている。昼間に実施される灯ろうの展示を見るために人は集まり一定時間滞留する。このように場としての利用がなされると、いつしかその場を使いやすく心地よいものにしたという意見が出され、それらの声が集まって少しずつ空間の改善へと意識が向かう。地域の環境とは本来このように形成されるべきであろう。今後もこのように住民が川を共同で活用するイベントを企画、実践する取り組みは大いに促進されるべきであり、行政にはそれらの取り組みを何らかの形で支援することが求められる。

また、このようなイベントや流域の動向は明神川流域全体で共有されることが望ましい。個別の流域だけでは抱えきれない問題も、お互いに情報交換することで解決の糸口が見える場合がある。そのためにはこれまで続いてきた上賀茂小学校のコミュニティを中心に、それぞれの流域の世話役や既存の組織も組み込んだ新しい共同体を結成することが求められる。さらにそこに柊野小学校を核とするコミュニティが加わり、賀茂川と賀茂川を水源とする明神川を保全するための集団へと発展させることが望ましい。

人がつくった川は人が世話をし続ける必要がある。それを負担であると感じる現実も確かにあるが、その負担を越えて余りある恵みも与えてくれる。自分の住む地域の歴史や文化、自然のありようを知り、それらを謙虚な気持ちで享受しながら地域の環境と共に生きていくこと、それが個々人の真の精神的な豊かさにつながることを忘れてはならない。

最後に、このたびの調査に協力いただいた全ての方々に謝辞を申し上げます。

〔註〕

- 1) 宇戸純子「明神川の水辺空間構成の現況―その1―」京都産業大学総合学術研究所「京都の活性化を目指した水環境と生活文化に関する調査とその展開」2002
- 2) 宇戸純子「明神川の水辺空間構成の現況―その2―」京都産業大学総合学術研究所「バイオリージョナリズムに基礎をおく京都の自然と生活文化に関する調査およびその展開」2003
- 3) 柊野社会福祉協議会 柊野町内会連合会「ひらぎの郷土誌」2000
- 4) 柊野町内会連合会副会長より資料提供
- 5) 京都市水道局北営業所の資料によると、このあたりに上水道が接続されたのは昭和31年頃である。

- 6) 勝矢淳雄「上賀茂明神川における美化保全活動の課題と今後の展開」京都産業大学国土利用開発研究所紀要 2001